

韓国の経済・ビジネス環境について (ソウル)

▼新長官就任と対韓投資増加策

2016 年 1 月、韓国の産業通商資源部 (日本の経済産業省に相当) のトップが約 3 年ぶりに交代となった。就任した周亨煥長官は官庁出身で、前職は企画財政部 (日本の財務省に相当) の次官だった人物だ。

同部は、海外からの投資誘致を担う。2 月には新長官主導で、さらなる対韓投資拡大策を決定した。日米欧等の商工会議所との会合を開き、各団体代表らを前に新たな支援を約束。長官、局長級による意見集約の機会を増やし、よりきめ細かい、スピード感のある隘路事項の解消体制の構築や、投資要件の緩和、バイオなどの新産業分野への R&D 支援拡充を行うとしている。



周 長官と日米欧等の商工会議所との懇談会 (2/19 ソウル)

▼日系企業従業員、ビザ更新できず

その一方、先日ある時、日系大手メーカーの社長から嘆息まじりの声を聞いた。

「韓国の入国管理局に従業員のビザの更新申請に行ったら、今後にはできないと言われた。このままだと韓国企業との共同プロジェクトが立ち往生してしまう」

入管側の説明によると、投資ビザの発給基準が昨年に変更され、投資額 5 千万ウォンにつき駐在員 1 人を認めることにしたのだという。同社の投資額は 10 億ウォンなので、最大 20 人。現在 30 人いるから 10 人分は「基準超過」で更新できない、というわけである。

韓国の外国人投資促進法では、投資ビザ取得のため

に必要な最低投資額は 1 億ウォンである。そして、実際に認められるビザ発給数、つまり駐在員の数は、これまで投資額の多少だけを基準としていなかった。国内にもたらす利益可能性、国内産業の発展への寄与の度合いなどにより、総合的に判断してきたからだ。

よって、高度な技術移転等を伴うような投資の場合、エンジニアは投資額にかかわらず、ビザが発給されやすい状況にあった。その方が国益に適うからである。

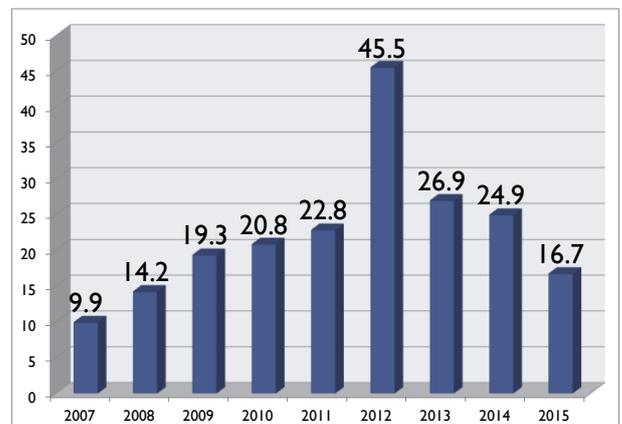
▼真正面からの環境整備を

入管は、規則に従って手続きしているにすぎないので、現場の対応としては間違っていないのだろう。

規則の変更には理由があり、一部の中国人などが不法就労の隠れ蓑として投資ビザを不正に利用するケースが急増していることが一因とされている。ルールを明確にして厳格な運用と行う、という趣旨だ。

しかし、ビジネス環境の観点でみると、首をかしげざるを得ない。なぜなら、先に述べたように、韓国政府は海外からの投資を増やそうと躍起だからである。

近年、日本の対韓直接投資額は、申告ベースで、年間約 20 億ドル台 (2012 年のみ 45.5 億ドル) で推移していたが、去年は約 16.7 億ドルと一気に減少した。主要因はウォン高に振れた為替だが、上昇を続ける人件費、労使交渉の難しさ、業界を縛る厳しい規制なども投資意欲を阻害しているといわれる。



日本の対韓投資額の推移 (単位：億ドル、産業通商資源部)

まさかこうした課題を置き去りにして、対韓投資額を増やすために、基準を変えたとは思いたくない。駐

在員を増やしたければ増資せよ、というのはあまりにも小手先である。今回のケースは、単に官庁間での擦り合わせ不足の結果だと思われる。

先の日系企業では、現在対応策を検討中だが、米国資本大手でも同様のトラブルを招いていると聞く。

韓国のライバルはいよいよ成長著しいアジア各国となる。真正面から隘路事項の解決を図り、投資環境の整備を行うことが本筋であろう。

韓国では、4月に4年ぶりの総選挙が行われる。今後、日系企業をはじめとする外国企業の投資環境がどのように改善されてゆくのか、注視される。

(2016/4/1)

(ソウルジャパンクラブ 常務理事 松本 憲治)

最近の中国・上海～駐在1年目の見聞録～（上海）

「中国の1,000年は西安を見ればわかる。500年は北京を見ればわかる。100年は上海を見ればわかる。」

（出典：榎本泰子著「上海」中公新書）といわれるとおり、上海は発展が著しい中国の今の姿を如実に物語っている。本稿では一生活者から見た今の上海の姿の一端をご紹介します。

当地に着任して1年、最初に驚いたのはスマートフォンの普及ぶり。生活の隅々までスマホが活用されている。銀行ATMでお金を引き出せば即時に引き出し金額と残高がショートメールでスマホに届く。お昼ごはんも午前中にスマホで注文すれば温かい昼食がオフィスに。スマホさえあればタクシーを呼んだり、酔っ払った時の車の運転代行も簡単に見つけることができる。スマホを生活の道具として徹底的に使いこなす姿は日本よりも進んでいるのではないか。中国で「独身の日」と呼ばれる11月11日、インターネット通販で最大手のアリババは、一日の販促イベントだけで912億元（1兆7,000億円）を売り上げた。同社はビッグデータを活用し、クリックしてから最短わずか15分で顧客に商品が届く体制を整え、このキャンペーンに臨んだという。

公共交通網の整備ぶりにも驚かされる。特に2010年の上海万博を機に急速に整備が進んだ地下鉄は14の路線が市内を縦横に走り、運賃はわずか3～10元。リニアモーターカーは最高時速約400kmで市内と浦東国際空港を最短8分で結ぶ。また地方各主要都市へと延びる高速鉄道は日本の新幹線にひけをとらない快適さと運航状況である。2011年の高速鉄道の衝突脱線事故の記憶を引きずっていた筆者にとって、昨



年初めて高速鉄道に乗ったときの認識ギャップは衝撃的だった。

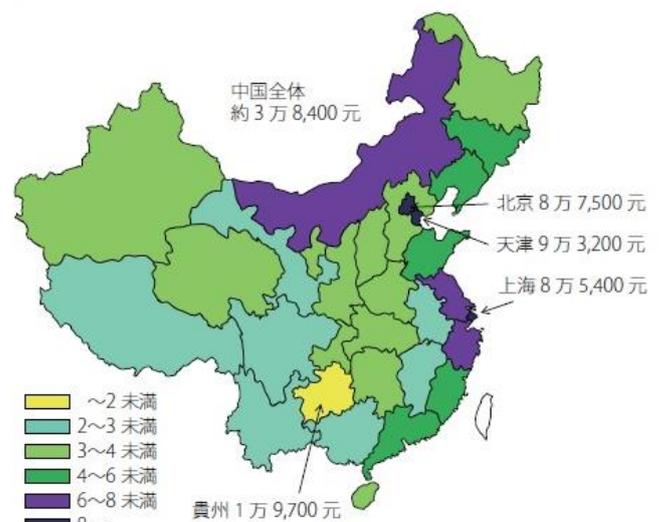
上海市内と浦東国際空港を結ぶ高速鉄道

飲食店の領収書にスクラッチくじが付いているこ

とに最近になって気がついた。領収書の右上の銀箔をこそげ落とすと「謝謝」または「10元」などの金額が出てくる。「謝謝」は「はずれ」だが、金額が出てくれば銀行で現金と交換することができ、外出時のささやかな楽しみとなっている。このくじは事業者に正しい売上計上と適正な納税を促すための工夫だという。ここでいう「領収書」は単なるレシートではなく、税務上の要件を満たした公式な領収書であり、飲食店はそれを発行する器具を店頭を設置する必要がある。残念ながら筆者はこのくじに気づかず、これまでかなりの領収書を廃棄してしまった。

上海市の一人当たりGDPは8万5,400円で全国省市別で第3位。上海とりわけ都市部の生活はほぼ先進国のそれに近い。一方で、最も一人当たりGDPが低い貴州省は1万9,700円で上海の4分の1にも満たず、依然として国内には大きな経済格差が存在している。しかし急速に発展を続ける中国の最先端の部分をウォッチし続けることは大事である。メディアの報道だけに頼ることなく時には自ら現地を訪れて実情をご覧になることをお勧めしたい。上海は日本全国21都市と80近い直行便で結ばれており、わずか2～3時間で渡航可能である。（文中の一人当たりGDPはいずれも2012年の数値）

第II-1-3-24図 中国の地域別一人当たりGDP（2012）



備考：地図は概略。
資料：中国国家统计局、CEIC Databaseから作成。（出典：通商白書2014）

（上海日本商工クラブ 事務局長 小林 英文）